歩くなら天神。立ち止まるなら福高。いつも私に元気をくれる、福岡の景観。

愛するまち、天神。

福岡は「好きな景観」を思い浮かべるとキリがなくなるほど、魅力的な景観がたくさんあるまち。あえて1つに絞るとすれば、私の場合は「天神」が最も好きな景観ということになるでしょうか。

山と海と川が見守ってくれて素晴らしい公園があって、そして、何より天神がある―。かつて9年ほど東京で暮らして再び福岡に帰ってきた時も、天神に行って「ああ、やっと福岡に帰ってきた」と実感したのを覚えています。その頃はちょうど地下街ができる途中だったでしょうか。確かに東京は「天神が幾つもある」という大都会でしたが、私にとっては本物の天神に勝るまちはありません。その魅力はまず人が風景に血を通わせている景観というか、決して急ぎ足ではなく、歩幅が穏やかな人達と建物と音とが一体となった、華やいだ中にも何かほっとするような特別な雰囲気に満ちたまちであるということ。そして、近づいてくる季節を感じたり、「あの人にこれをプレゼントしたらどうかしら」と、大切な人を思い出すきっかけをくれたり、新しいファッションにときめいたりといった具合に、天神は、そこで出会ったモノやコトや人が次の自分へのエネルギーをくれるような気がして、昔も今も私に元気をくれる景観なんです。

思春期の自分がそこにいる景観。

実はもう1つ捨てがたい景観があって、それは私が思春期を過ごした福岡高校の前の銀杏並木。心の芯にある景観です。友達とはしゃぎながら歩いたこともあれば、どういう風に生きていこうか考えたり、悩んだりしながら歩いたりもした。そんな多感な時代を思い出させてくれる場所。〝歩くなら天神、立ち止まるなら福高〟、そんな感じでしょうか。

ひと呼吸置いて、さらなる発展へ。

福岡は、天神もそうですが、新しいものが生まれ、変化し、動き続けていますね。ますます楽しくなってきたというふうに思います。でも一方で、ひと呼吸置いて、落ち着いてまちづくりを考える時期に来ているのではないのかな、とも感じます。福岡の人は周りと調和しながら折り合っていくのがとても上手な人達。だから新しいものと古いものが折り合って、都会と自然が共存して、いろいろな年代の人とまちがより良い関係を作れる、そんなまちづくりを重ねてほしい。例えば、天神にはもっと緑を増やしてほしいとか、これからは高齢化がますます進むのだからベンチなどの休憩スポットが随所にあれば、とか。いろいろな側面から調和を大事にしながら、さらに発展していくことを心から願っています。

大野城まどかぴあ館長
林田スマ
Hayashida Suma

福岡県嘉穂郡嘉穂町（現嘉麻市）生まれ。九州大学大学院人間環境学府修士課程終了。元RKB　毎日放送アナウンサー。結婚のためRKBを退社後、専業主婦を経てフリーアナウンサーに復帰。現在もテレビやラジオの番組を中心に企業やPTAの講演などを行う。筑紫女学園大学非常勤講師。大野城まどかぴあ館長。

景観は「みんな」のもの。

人々に命を吹き込まれた景観が、まちを豊かに幸せにする。

福岡市郊外に開業するリゾートホテルの総合アートディレクションを担当していた私が、初めて福岡を訪れたのは25年ほど前。福岡空港から志賀島へ車で移動する途中、その車窓から見た景色は今も心に残っています。

遠くに見える山並み、まちを包み込むように広がる博多湾、道路の脇には緑豊かな樹木が茂り、弓なりに延びる真っ白な砂浜の向こうに続く、真っ青な海と空…。福岡はなんて美しいまちだろう。それが私の最初の印象でした。

ホテルのデザインはもちろん、周辺の美しい景観や豊かな環境を十分意識しました。そして1987年4月、「ホテル海の中道」がオープン。実は同じ年の同じ月、日本国有鉄道（国鉄）が分割民営化され、JR九州が誕生しています。ホテルのオープニングセレモニーで、JR九州の社長とお会いしました。私の人生を大きく変える出会いです。

博多駅と志賀島を結ぶ香椎線を走るリゾート列車の仕事を皮切りに、九州の列車、バス、高速船、新幹線、駅などのデザインを手がけることになり、福岡や九州との長いおつきあいが始まったんです。

列車や駅は、公共の空間です。年齢も、男女も、生きる環境も、さらには国籍も違う人々が集まります。それを分け隔てることなく、あらゆる人が安全に、快適に、そして楽しく過ごせる空間を創り出さなくてはいけません。「まち」も同じです。

さまざまな人が集い、出会い、交流する豊かで幸せな「まち」。人々によって命を吹き込まれたまちの「景観」は、いきいきとみずみずしく、生命力に溢れていますよね。

たくさんの「宝物」が詰まった未来を、大人たちは子どもたちへ残す義務がある。

私は、常に「水をデザイン」したいと思っています。清く、正しく、美しい平和なまちにはいつも「水」がそばにある。きれいな水があれば大地は潤い、植物は花を咲かせ実を結ぶ…そして生物はのびのびと育まれます。

福岡市は都会でありながら「水」に恵まれていますよね。山々が稜線を描き、そこから幾筋もの川がまちを走り、すぐそばに横たわる海を抱く。水のある景観が人々を潤し、豊かな時間を創出しています。

さらに、いにしえの時から大陸との交流を深め、独自の文化を紡いできました。福岡ならではの「宝物」は多彩です。

私は、観光（旅）とは景観を観に行くことだと思っています。歴史、文化、風土、人…培ってきたその土地ならではの景観に触れることで、旅人はほっとしたり、わくわくしたり、感動したり。旅をすることで心に元気を蓄積していきます。

多彩な「宝物」が散りばめられる福岡らしい景観。住む人も、訪れる人もいつでも元気をもらえる景観。そんな景観をこれから市民がどう創り、次の世代へと繋いでいくのか。

そのためには、私たち大人がまず行動しなければいけません。子どもたちへすばらしい環境を残すために、全身全霊で立ち向かう義務があるのです。そして子どもたちは、大人たちが育んできた環境にふれ、感じる権利があります。

福岡の、九州の、未来のために。既成概念に捕われず、失敗を恐れない勇気と多様性を受け入れる柔軟さを常に持ち、「世界に誇れるまち」福岡へと、一人一人が力を出し合ってほしいと願っています。

デザイナー
水戸岡 鋭治
Mitooka Eiji

1947年岡山県生まれ。（株）ドーンデザイン研究所主宰。JR九州デザイン顧問・両備グループデザイン顧問。デザイナー、イラストレーター。建築・鉄道車両・グラフィック・プロダクトなどさまざまなジャンルのデザインで活躍を続けている。なかでもJR九州の駅舎、車両の斬新なデザインは、鉄道ファンの枠を超え、広く注目を集め、ブルネル賞・ブルーリボン賞・ローレル賞・鉄道文化賞・毎日デザイン賞など多くの賞を受賞している。おもなデザイン作品に、JR九州の新幹線800系、特急車両の885系、787系、西鹿児島駅、熊本駅ビル、岡山電気軌道の路面電車「MOMO」などがある。